



世界文学全集 32

トーマス・マン

詐欺師クルルの告白

トーニオ・クレーガー
他

佐藤晃一 訳

河出書房新社

世界文学全集32 トーマス・マン



© 1963

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和38年3月10日 初版印刷
昭和38年3月15日 初版発行

定価 320円

訳 者 佐藤 晃 一
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 草 刈 親 雄
装 幀 原 弘

印 刷・中央精版印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社
本文用紙・日本紙業株式会社
同 納 入・東邦紙業株式会社
クロース・東洋クロス株式会社
同 納 入・株式会社石綿商店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

幸福への意志	三
幻滅	三
小さなフリーデマン氏	三二
道化者	六二
トビース・ミンダーニッケル	九五
衣装戸棚	一〇六
ルイスヘン	二七
トリスタン	一三六

トーニオ・クレーガー	一八七
予言者の家で	二六〇
悩みのひととき	二七〇
詐欺師クルルの告白	二八〇
掟	三七九
年譜	四五三
解説	(訳者) 四六三

トーマス・マン作品集

幸福への意志

老ホフマンはその金を南アメリカの農場主として儲けたのだった。彼は、その地で家柄の良い土着の娘と結婚してから、まもなく妻を連れて故郷の北ドイツへ引きあげてきたのである。彼らはぼくの生まれた町で暮らしていたが、そこにはホフマンの他の家族たちも住みついていた。パーオロはこの町で生まれた。

しかし、パーオロの両親をぼくはあまりよくは知らなかった。とにかく、パーオロはその母親に生きうつしたたのである。ぼくが彼をはじめて見たとき、というのは、ぼくらの父親たちがぼくらをはじめて小学校へ連れていったとき、彼は黄ばんだ顔色の、痩せこけた少年だった。いまでもその姿が目に残る。彼はそのとき黒い髪の毛を長く伸ばしていたが、それがもじやもじやとちぢれながら水兵服の襟に垂れかかって、細面の彼

の小さな顔を縁取っていた。

ぼくらはどちらも家庭では非常に幸福に暮らしていたのだから、新しい環境、つまり殺風景な教室や、とくに、ぼくらにぜひともABCを教えようとする赤ひげの、みすばらしい人間にはどうしても同意できなかった。ぼくは立ち去ろうとする父親の上着を泣きながらしっかりとつかんでいたが、パーオロはまるきり受け身の態度を取っていた。彼は身動きもしないで壁にもたれて、細い唇をきゅっと引きむすんだまま、涙でいっぱいになった大きな目で、希望に満ちた他の少年たちをじっとみつめていたのである。その連中は横腹をつつきあいながら、思いやりもなくにやにや笑っていた。

こんなぐあいには鬼のような連中に取りこまれていたので、ぼくらは最初からおたがいひきつけられるような感じがして、赤ひげの教育家がぼくらを並んですらせてくれたときには、非常にうれしかった。そのときからぼくらは団結して、共同で教育の基礎をきずいたり、毎日弁当のバターを交換したりした。

ところで、いま思い出してみると、彼はもうその当時から虚弱だった。ときどきかなり長く学校を休まなけれ

ばならなかったのだが、また出てくると、いつも彼のこめかみや頬には普段よりいっそうはつきりと血管のうす青い筋が浮き出ていた。きやしゃな、褐色のはだをした人にかぎって、よくそういううす青い筋を出しているものである。彼はいつもそれを出していた。それは、ぼくらがこのミュンヘンで再会したときにも、また、その後ローマでめぐり会ったときにも、第一番にぼくの目についたものだった。

ぼくらの親交は、それが生まれたのとはぼ同じ理由から、学校時代を通じてずっと継続した。理由というのは同級生の大多数にたいする「距離の激情」だったが、これは、十五歳でひそかにハイネを読み、高等学校の第三学級くらいで世界や人類に断固とした判断をくだすほどの者なら、だれでも知っている激情である。

ぼくらは——ふたりとも十六歳だったと思うが——ダースの稽古にもいっしょに行つて、その結果いっしょに初恋を体験した。

彼がすっかりまいった小娘は金髪の快活な子で、その子を彼は、年のわりにはたいへんな、ぼくにはときどきほんとに無気味に思われたほどの憂鬱うつろな熱情であがめて

いた。

ぼくはとくにある、舞踏会のことを思い出す。その少女が、彼ではないある少年にほとんどたてつづけに二度もコチリオンを踊つてやりながら、彼には一度も踊つてやらなかった。ぼくは不安な思いで彼の様子に注意していた。彼はぼくと並んで壁にもたれたまま、身動きもしないで自分のエナメル革の靴をにらんでいたが、突然氣を失つて倒れてしまった。家へ運びかえされてから、彼は一週間病床についていた。その当時——この事件のときだったと思う——彼の心臓の申し分なく健全なものではないことがわかつたのである。

すでに、この事件のときよりも前に、彼は絵を描くことをはじめていて、それにはすぐれた才能を発揮していた。木炭の走り描きで、あの少女の面だちをいかにもまざまざと現わした端に、「なれば花にも似たるかな！——パーオロ・ホフマン作」と書いてある一枚を、ぼくはいまでも持っている。

いつのことだったか正確には覚えていないが、ぼくらがもうかなり上級に進んでいたころ、彼の両親はぼくの生まれた町を去つて、カールスルーエに住みついた。老

ホフマンは、そこに何かと知り合いを持っていたのである。パーオロは学校を変えないことになって、ある老教授の家に下宿させられた。

しかし、この状態も長くは続かなかった。つぎの事件は、パーオロがある日両親のあとを追ってカールスルーエへ行ったことの、直接のきっかけではなかったとしても、とにかくそのうながしにはなったと思う。

つまり、ある日の宗教の時間に、担当の先生が相手をよくみあがらせてしまうようすさまじい目つきで、つかつかとパーオロのほうへ歩みよると、彼の前にあった旧約聖書の下から一枚の紙をひっぱり出したのである。

その紙には、左足だけまだ出来あがっていない、非常に女性的な姿が、いささかの羞恥の色も見せずに描かれていた。

そういうわけでパーオロはカールスルーエに行った、そしてときどきぼくらは葉書をやり取りしたが、この文通も次第に間遠になっていて、まったくだえてしまった。

ミュンヘンでまた彼にめぐり会ったのは、別れてから五年ほど過ぎたのちのことだった。あるうららかな春の

午前に、ぼくがアマーリエン街をくだってゆくと、だれかアカデミーの前面の階段をおりてくる姿が見えた。それは、遠くから見るとイタリア人のモデルとでもいうような感じだった。近づいて見ると、それはまさに彼だったのである。

中背で、ほっそりとして、濃くて黒い髪に帽子をあみだかぶりにして、青筋の浮き出ている黄ばんだ顔色をして、粋な服装なのに投げやりな着方をして——たとえばチョッキのボタンが二つ三つとめてなかった——、短い口ひげを軽くひねりあげて、というような様子をしながら、彼は持ちまえのぶらぶら身をゆするような無精らしい足どりで、ぼくのほうへ歩いてきた。

ぼくらはほぼ同時に気がついて、いともねんごろに挨拶をかわした。カフエー・ミネルヴァの前でたがいに最近数年間の過ごし方をたずね合っているあいだ、ぼくには彼が意気軒昂とした、ほとんど熱狂的な気分であるように思われた。彼の目はきらきらと輝き、身ぶりは大げさな大ぶりなものだった。それでいて顔色が悪く、実際にどこか病気のような様子に見えた。いまとなつては、ぼくはもろろにでも言えるわけだが、しかし、そ

のときの彼の様子はほんとうにぼくの注意をひいたのだし、それどころか、ぼくは遠慮なしに彼にそう言つてやつたのである。

「そうか、あいかわらずか？」と彼はたずねた。「うん、そうだろうと思う。ずいぶん病氣をしたからね。つい昨年も長いあいだ、しかも大病をしたよ。ここが悪いんだ」

彼は左手で自分の胸をさした。

「心臓だよ。昔からいつもこれだったんだ。——しかし最近はともぐあいがいい、すばらしくいい。まったく健康だと言つてもいいくらいだよ。それにぼくはやつと二十三だからね——なんとも悲しかろうじゃないか……」

彼はほんとうに上機嫌だった。ぼくらが別れてからの彼の生活を、ほがらかに元気に物語つた。ぼくと別れてからまもなく、画家になることをとうとう両親に許してもらつて、九カ月ほど前にアカデミーを卒業してから——さっきは偶然そこに寄つただけのことにすぎない——、しばらく旅に出て、とくにパリで暮らしていたが、いまはほぼ五カ月前からこのミュンヘンに住みつい

ている……「たぶんまだ長いこといるかもしれない——どうなるやら？　ひよっとすると一生いるかもしれない……」

「そうかな？」とぼくはたずねた。

「というところ？　つまり——そうなたつていいじゃないか？　この町が気に入つてゐるんだから、特別に気に入つてゐるんだから！　全体の調子も——どうだい？　人間も！　それから——これはなかなか大事なことが——画家としての、まったく無名でもだよ、社会的地位がじつにすばらしい、どこよりもいいんだよ……」

「うん。——数はすくないが、しかし非常にいいのがね。たとえばある一家だが、きみに紹介せずにはいられないな……　謝肉祭のときに知り合いになった家だがね……　この謝肉祭はすてきだぜ——！　シュタインという家なんだ。しかもシュタイン男爵だよ」

「いったいどんな貴族なんだ？」

「金力貴族というやつだよ。この男爵というのは株屋だったんだが、以前はヴィーンでどえらい勢力があつて、王侯の全部と交際したりなんかしていたんだよ……　そ

れから急にしぼんできて、百万ばかり残して——という噂だが——事業から手を引いた、そして、いまはこの町で、はなやかさはないながら貴族的に暮らしている」

「ユダヤ人かい？」

「男爵は、そうじゃないと思う。細君のほうはそうかもしれない。とにかく、ぼくは、みんな非常に愉快な上品な人たちだとしか言いようがないよ」

「子供は——いるのかい？」

「いない。——と言うのは、つまり——十九になる娘がひとりいる。両親は非常にあいさうのいい人たちだよ……」

彼は一瞬間うろたえたが、それからこうつけ加えた、
「本気ですすめるんだが、ぼくがきみをこの家に紹介することにしようよ。ぼくにはうれしいことなんだがね。承知してもらえないのかな？」

「承知だとも。感謝するよ。その十九の娘さんと知り合いになるためだけでもさ——」

彼は横目でぼくを見て、それからこう言った、
「じゃあそうしよう。そうなるとあまり先へ延ばさないほうがいい。きみの都合がよければ、あす一時か一時半

ごろ誘いにゆく。シュタインの家はテレージエン街二十五番地の二階だ。あの人たちに同窓の友人を紹介するのは楽しみだよ。これで話は決まったぜ」

じつさい、ぼくらはその翌日の正午ごろ、テレージエン街の、あるりっぱな家の二階で鈴を鳴らしたのである。鈴の横には太い黒い字で、「フォン・シュタイン男爵」という名が書いてあった。

パーオロは途中ずっと興奮しつづけていて、ほとんど有頂天^{ちやうてん}なはしゃぎ方をした。ところが、いま、ドアの開くのを待っているあいだに、ぼくは彼の様子に奇妙な変化を認めた。ぼくと並んで立っている彼は、まぶたを神経質にひくひくさせているほかは、どこも完全に落ち着いていて、——それはむりにつくろった、緊張した落ち着きだった。彼は首をすこし伸ばしていた。額の皮が張りきっていた。その様子は、耳をびくびくとそば立てて、筋肉という筋肉を緊張させながら物音をうかがっている動物とでもいうような印象を与えた。

ぼくらの名刺を受け取って、いったん引っ込んだ召使が、また出てきて、奥さまはすぐお見えになりますから、しばらくお掛けになってください、とうながしながら、

ら、かなり大きな、濃い色の家具をあしらった部屋のドアを開けてくれた。

ぼくらがその部屋へはいってゆくのと同時に、往來に面した張り出し窓のところで、明るい色の着着をまとった若い婦人が立ちあがると、一瞬間、探るような表情でたたずんでいた。「十九の娘だな」と考えながら、ぼくは思わず、つれのほうへ横目を使った。すると、「男爵令嬢アーダー！」と彼がぼくにささやいた。

彼女は品のいい姿ながら、年のわりに成熟した身体つきをしていて、非常にやわらかな、ものうげとでもいうくらいな身のこなしを見ると、そんなに若い娘とはほとんど思えないほどだった。こめかみにかぶさりながら二つの巻き毛になって額まで出ている結い方にした髪の毛は、つやつやとした黒で、顔色のほの白さと印象的な対照をなしている。顔には、ふっくらとして濡れた唇と、肉ぶとな鼻と、ハダンキョウ形の黒い目と、その目の上に弓なりにかかった黒いやわらかな眉とがあるのです、彼女がすくなくともいくらかユダヤ人の血を引いていることには疑いの余地もなかったが、しかし、その顔はまったく異常な美しさを持っていた。

「あら——お客さま？」と、彼女は数歩ぼくらを出むかえながらたずねた。その声にはすこし含み味のあった。もっとよく見ようとするためのように、彼女は片手を額にかざしながら、もう一方の手を壁ぎわにあるグランド・ピアノの上についた。

「それに、たいへんうれしいお客さまのようですよ——？」と、彼女は同じ語調で、いまはじめてぼくの友人をそれと認めたとでもいうようにつけ加えた。それからぼくのほうへ問うようなまなざしを向けた。

バーオロは令嬢のほうへ歩み寄って、選り抜きの享樂にふける人の、ほとんどのものうげなほどゆるゆるとしたしぐさで、さしのべられた彼女の手の上へ、何も言わずに身をかがめた。

「お嬢さん」と、やがて彼は言った、「失礼ですが、ぼくの友人を紹介させていただきます。いっしょにABCをならった学校友達です……」

彼女はぼくにも手をさし出したが、やわらかな、骨のないような感じの手で、飾りは何もつけてなかった。

「お近づきになれて、うれしゅうございます——」と言いながら、彼女は、かすかにふるえる癖のある黒い目の

まなざしを、じっとぼくにそそいだ。「それに両親も喜ぶことと存じます……もうお取りつぎしてありますでしよう」

彼女が低い長椅子に席を取ると、ぼくらふたりはそれに向かい合つて椅子に腰をかけた。彼女の白い、力のなさそうな両手は、雑談のあいだ、膝の上から動かなかつた。ゆるやかな袖は肘をわずかだけ越していた。手首のやわらかな形がぼくの注意をひいた。

数分してから隣室に通ずるドアが開いて、両親がはいつてきた。男爵はいきな身なりの、ずんぐりした、はげ頭の人で、灰色のところがりひげをはやしていた。太い金の腕輪をカフスのなかへ押しもどす彼のしぐさには、だれにも真似のできないおもむきがあった。男爵にされた当時彼の姓が二綴りか三綴りその犠牲になったのかどうか、はっきり確かめることはできなかった。彼にくらべると、夫人のほうは無趣味な灰色の服を着たみにくい小柄なユダヤ女というにすぎなかった。彼女の両耳には大きなダイヤモンドがきらきらと輝いていた。

ぼくは紹介されて、非常にあいそうのよい挨拶を受けたが、その一方、ぼくのつれはこの家の親しい友達とし

て男爵夫妻と握手をかわした。

ぼくの出身や経歴についていくらか問答があつたのち、パーオロの絵——女の裸体画——が出品されている展覧会の話がはじまつた。

「じつにみごとな作品ですなあ！」と男爵は言った。

「わたしはこのあいだ半時間もあの前に立っていましたよ。赤い毛氈もうせんの上のあの肉色なんかは、ずば抜けて効果的ですな。いや、いや、大したもんですよ、この Hoffman 君は！」そう言いながら男爵はいかにもパトロンのくパーオロの肩を叩いた。「それにしても、仕事をやりすぎちゃいかんよ、きみ！ 後生だからやりすぎないように！ きみはぜひとも身体をいたわる必要がある。いったい健康状態はどんなふうかね？」——

パーオロは、ぼくが主人夫妻にぼくのことと必要な説明をしていたあいだ、彼のすぐ差しむかにすわっている令嬢と低い声で二、三言葉をかわしていた。ぼくがさきほど彼の様子に認めたあの奇妙に緊張した落ち着きは、すこしも失われていなかった。どこがそうだからとはっきりは言えないながらに、彼は、いまにも跳びかかろうとしている豹のような印象を与えた。黄ばんだ細面

の顔についた黒い目がかにも病的な輝きを帯びていたので、男爵の問いに答えて彼がすこぶる確信ありげな調子でつぎのように言ったときには、ぼくはそれを聞いていてほとんど無気味な感じがした。

「いや、すばらしい状態です！　どうもありがとうございます！　とてもいいぐあいなんです！」

——十五分ほどしてぼくらが席を立ったとき、男爵夫人はぼくの友人に、二日後はまた木曜日だから、いつもの五時のお茶を忘れないようにと注意した。そのついでに夫人はぼくにも、どうかこの日のことを覚えていてもらいたいと言った。

往来へ出るとバーオロは紙巻きたばこに火をつけた。

「どう？」と彼はたずねた。「感想は？」

「いや、非常に気持ちのいい人たちだよ！」とぼくは急いで答えた。「あの十九の娘さんには感嘆させられたくらいだ！」

「感嘆させられた？」彼はちょっと高笑いして、首をそむけた。

「そうか、きみは笑うんだな！」とぼくは言った。「そのくせあの二階じゃ、ときどききみの目が——秘密な

ことがで曇るような気がしたがね。しかし、ぼくの思い違いかな？」

彼は一瞬間黙っていた。それからゆっくりと首を振った。

「ぼくにはわからないね、どうしてきみが……」

「いや、しらばくれないでくれよ！——問題はもうぼくにとつてはただ、アーダ嬢のほうでも……」

彼はまた一瞬間黙ったまま足もとを見おろしていた。それから低い声で確信ありげに言った、

「ぼくは幸福になるだろうと思っている」

ぼくは、心のなかではある危惧の念を抑えることができなかったのだが、ねんごろに彼の手を握りしめて、別れを告げた。

それから数週間すぎた。そのあいだぼくはときどきバーオロといっしょに男爵の客間で午後の茶を飲んだ。そこにはいつも、小人数ではあるが非常に気持ちのいい連中が集まった。宮廷劇場に出ている若い女優、医者、将校——ぼくはもういちいち思い出せない。

バーオロの挙動には別に変化も見えなかった。不安な思いをさせる顔色ではあったが、彼はいつも意気軒昂と

した、うれしそうな気分できて、男爵令嬢のそばにるときにはかならず、ぼくが最初彼の様子に認めたあの無気味な落ち着きを見せていた。

すると、ある日——パーオロには偶然三日間会わずにいたのだが——ぼくはルートヴィヒ街でフォン・シュタイン男爵に出くわした。馬に乗っていた男爵は、馬をためて、鞍の上からぼくに手をさしのべた。

「いいところでお会いました！ あすの午後はうちへお見えくださるでしょうな？」

「お許しくださるのでしたら、かならずまいります、男爵。友達のホフマンがいつもの木曜日のように誘いにきてくれるかどうか、それがもしかしてはつきりしないような場合でも……」

「ホフマン？ おや、ご存じじゃないんですか——彼は旅に出ましたよ！ あなたにはお知らせしたろうと思っ

ていましたかね」

「いや、ひとも知らせません！」
「それじゃあ、まったく気まぐれに (à bâton rompu) です…… 芸術家的気まぐれというやつですね……
では、あすの午後に！——」

そう言うとき男爵は馬を進めて、すっかり当惑したぼくをあとに残していった。

ぼくはパーオロの住まいへ急いだ。すると——ええ、お気の毒ですが、ホフマンさんは旅にお出かけになりました。滞在地の所番地は残していらいしゃいませんでした、ということだった。

男爵が「芸術家的気まぐれ」などということ以上に知っているのは、明らかなことだった。彼の娘自身が、きっとそうにちがいないと最初からぼくの予想していたことを確かめてくれた。

それは、そういう企てがあつてぼくも誘われた、イーザル川の谷間への散歩のときに起こったのである。みんなは午後になってからやつと出発した、そして、夕方遅くなったその帰り道で、男爵令嬢とぼくがたまたま最後の一組として一行のあとについてゆくことになった。

令嬢の様子にはパーオロが姿を消してから何もひとつ変化は認められなかった。彼女は完全にその落ち着きを保っていて、両親のほうではパーオロの突然の旅立ちについていろいろと遺憾の意を述べたのに、そのときまでは、ぼくの友達のことをひとことも言ったことがなかつ

たのである。

そのときぼくらは並び合つて、ミュンヘン近郊のあの最も雅致のあるところを歩いていた。月の光が木の葉の茂みをもれて、きらきらと輝いた。そして、しばらくのあいだぼくらは黙つて一行の他の人々の雑談に耳をかたむけていたが、それは、ぼくらのそばを泡立ちながら流れてゆく水のざわめきと同じように単調なものだった。

すると令嬢が突然バーオロのことを話しはじめた、それも、非常に落ち着いた、非常にしっかりした調子で話しはじめたのである。

「あなたはずっとお小さいころから、あの方のお友達でいらっしやいますわね？」と彼女はぼくにたずねた。

「ええ、そうです」

「あの方の秘密もご存じですわね？」

「いちばん大事な秘密まで知っているつもりです、彼が打ち明けてくれなくても」

「それでは、わたくし、あなたをお信じ申してもいいわけですかね？」

「それはお疑いにならないように願いたいものです、お嬢さん」

「それでは申しましょう」と言いながら、彼女はきっぱりとした身ぶりで首をもたげた。「あの方はわたくしに結婚の申し込みをなさいましたの、すると両親がおことわりしたのです。あの方にはご病気がある、重いご病気がある、と両親はわたくしに申しましたわ——けれども、ご病気がありでもどうでも、わたくしはあの方を愛しております。あなたに、こんなふうに申しあげてもかまいませんわね？ わたくし……」

彼女は一瞬間とまどったが、それからまた前と同じきっぱりとした調子で言いつづけた。

「あの方がいまだここにおいでなのか、わたくし存じません。けれども、あなたは、あの方にまたお会いになり次第に、あの方がもうわたくし自身の口からお聞きになつていらっしやる言葉、あの方以外の方との結婚はけつしていたしませんという言葉を、くり返してあの方にお聞かせくださってもかまいませんわ、また、あの方のいらっしゃるお所がおわかり次第に、いまの言葉をあの方に書いておやりになつてもかまいませんわ。ああ——いまにわかりますわ！」

この最後の叫びには、反抗と決意とのほかに、いかに